『史林』のなかの考古学

上原　眞人

『史林』発刊時、京大考古学講座はなかった

『史林』第一巻第一号の発刊は大正五（一九一六）年一月一日で、発足当初から、史学（国史学・東洋史学・西洋史学・考古学）と地理学との連携をうたっている。第一巻で立てられた項目は、「研究（現在の「論説」に相当）」「叢説（現在の「研究ノート」に相当）」「雑纂（現在の「資料紹介」に相当）」「批評（書評）」「紹介」「彙報」「会報」の七項目で、第二巻から「昨年の史学地理学界（学界動向）」が加わる。しかし、『史林』第一巻第一号の「紹介」項では、一般史学・国史・東洋史・西洋史・地理学に関するものという各細目はあっても、「考古学に関するもの」という細目はない。

その理由は、はっきりしている。『史林』発足当初は、京都大学には、まだ考古学講座がなかったのだ。まさに『史林』が誕生した一九一六年の九月一一日の勅令で、京都帝国大学文科大学に考古学講座が新設され、同年三月下旬に欧州留学より帰国した濱田耕作が助教授として着任する。我国最初の考古学講座だ。『史林』が創刊時から史学分野の一つに考古学を含めていたのは、濱田が帰国し新設の考古学講座に着任することを、あらかじめ承知していたからにほかならないだろう。しかし、史学のなかでは、考古学は新参者だ。新設の考古学講座を担当する濱田にとって、その存在を周知させることが当面の課題となったはずである。

なお、「紹介」項の細目は第一巻第二号までで、第一巻第四号以降は、紹介対象を「図書」と「雑誌」に大別するのみで、分野別細目を設けなくなる。分野横断の学際的研究が『史林』の一つの目的となる以上、当然の措置だ。本稿は〈『史林』のなかの考古学〉と題していても、他分野の専門家が考古資料を扱っている場合を含めて、議論の対象にする。

新設考古学講座と戦前の『史林』

十五年戦争終結以前（戦前）において、京都帝国大学考古学講座が生んだ最大の成果は、一九一七年の『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴』（京都帝国大学文科大学考古学研究報告第一冊）にはじまる、一般に「京大報告」と呼ぶ発掘調査報告書シリーズである。一九四三年三月の『大和唐古弥生式遺跡の研究』（京都帝国大学文学部考古学研究報告第一六冊）に至るまでの四半世紀の間に刊行した一六冊の報告書は、縄文時代の貝塚から近世キリシタン墓に至るまで、各時代・各地域・各分野の遺跡・遺物研究の基礎資料を提供しただけでなく、考古学研究の基本が報告書の刊行にあることを周知徹底させ、その体裁のあるべき姿を提示し、研究の方向性や可能性の広がりを示す指針となった。

たとえば、大分県に分布する磨崖石仏群の報告書（『豊後磨崖石仏の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告第九冊、一九二五年）の「後論」で、濱田は中国・インドにつながる磨崖石仏の源流を示唆した。これが東方文化研究所（人文科学研究所の前身）の水野清一・長廣敏雄による『雲岡石窟』（全一六巻三二冊、一九五一～五六年）、樋口隆康による『バーミヤン―京都大学中央アジア学術調査報告―』（全四巻、一九八四～八五年）に継承され、中央アジアと東アジアを結ぶ仏教文化と石窟寺院の系譜が明らかになる。

次々と「京大報告」を刊行する中で、戦前の考古学講座にとって『史林』は研究発表の場であるだけでなく、史学分野として新参者で得体が知れない考古学の存在を知らしめる広告塔としての役割があった。第二巻第四号（一九一七年）には、刊行したばかりの『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴』の「批評」を喜田貞吉が寄せている。考古学の報告書が周知されていない時代だからこそ、それがいかなるもので、どうあるべきかという提言を迅速におこなうことは、かなりのインパクトとなったはずである。

また、「叢説」や「雑纂」において、濱田がエトルリア文化（第二巻第一・二号、一九一七年）、後藤守一がモヘンジョ・ダロの発掘成果（第一五巻第三号、一九三〇年）、禰津正志が西アジアの考古学調査成果（第二二巻第一・二・四号、一九三七年）を紹介しているのも、考古学の広告塔として『史林』が役立っていたことを示す。『史林』に投稿した濱田の「研究」や「雑纂」は、「金蚕考」（第六巻第四号、一九二一年）、「細金細工に就いて」（第七巻第四号、一九二二年）、「京都帝国大学新着の埃及遺物」（第八巻第一号、一九二三年）、「古銀銅面考」（第一〇巻第一号、一九二五年）、「犍駄羅彫刻と六朝の泥象」（第一二巻第一号、

一九二七年）、「日向の二日旅―伊藤満所が母の事ども―」（第二一巻第二号、一九三六年）とあらゆる時代、あらゆる分野におよび、相互に脈絡を見出しがたい。「京大報告」と同様、一貫した研究成果を示すことよりも、考古学の可能性を提起することに主眼があったように思われる。

さらに、濱田耕作は第三・四巻（一九一八・一九年）に、「雑纂」として「考古学の栞」を連載する。現在なお考古学入門書として定評がある『通論考古学』（二〇一六年末に岩波文庫版が公刊された）の原形である。なお、第五巻第一号（一九二〇年）からは、建築史の天沼俊一が「日本古建築研究の栞」の連載を開始する。これは第一六巻第四号（一九三一年）まで四〇回におよぶ。『史林』が隣接分野の最新研究動向を周知させる役割を意識していたとすれば、考古学も史学の隣接分野と意識されていたことになる。

一九二〇年代以降、終戦前後までの『史林』に掲載された考古学関係記事においては、一九三九年に考古学講座第二代教授となる梅原末治の存在感が圧倒的である。一九二一～一九四八年の『史林』に掲載された四七本の考古学の「研究」「雑纂」のなかで、一五本（約三分の一）を梅原論文が占める。いずれも、漢式鏡、東アジア青銅器、東アジアの墓制を主題としており、一貫性のある研究成果を生んでいる。しかし、『史林』における梅原の活躍はこれに先立つ。『史林』第二巻（一九一七年）から第一五巻（一九三〇年）に掲載した「昨年の史学地理学界」では、考古学も一〇頁前後を費やして、過去一年間に発表された研究・報告書、発掘調査等を紹介し論評する。そのうち第二～九巻は梅原が執筆し、第一〇～一五巻は島田貞彦の執筆による。現在の定期刊行物なら、学界動向は時代・地域ごとの分担となるが、当時はすべて一人で執筆した。研究者層が薄いと言っても、かなりのエネルギーを必要とする。梅原が考古学の論文を恒常的に『史林』に投稿するようになるのは、広告塔・啓蒙手段となる学界動向の執筆を、島田にバトンタッチした後のことである。しかし、梅原は一九一〇年代から『歴史地理』『考古学雑誌』などに、西日本各地の考古資料を紹介しており、一九一九年以降は、京都府などが公刊する史跡調査報告書でも膨大な資料を公表する。信じ難いことに、一九二〇年代の外遊中も、そのペースは衰えない。『史林』の「研究」「雑纂」は、そのなかで投稿されている。

しかし、圧倒的存在感をもつ部内者の論文掲載が恒常化することが、部外からの投稿者を疎遠にしたことも否定できないだろう。一九三〇年前後には存在した原田淑人（第一三巻第一号、一九二八年）・後藤守一（第一五巻第三号）・木村捷三郎（同第四号、一

九三〇年）など、京大関係者以外の考古学「研究」「雑纂」執筆者は、『史林』誌上からほとんど姿を消してしまう。

戦後における『史林』の役割

一九七一年、京都大学文学部考古学研究室に所属した私は、『史林』を考古学専攻生（おもに大学院生以上）が修士論文や卒業論文の成果の一部を公表し、学界にデビューするための登龍門だと思っていた。当時、研究室の先輩や同僚が、その成果を「論説」「研究ノート」として、次々と『史林』誌上に公表していたからだ（西谷正「朝鮮における金属器の起源問題」第五〇巻第六号〈一九六七年〉、石毛直道「日本稲作の系譜」第五一巻第五・六号〈一九六八年〉、近藤喬一「朝鮮・日本における初期金属器文化の系譜と展開」第五二巻第一号〈一九六九年〉、山本忠尚「スキタイ式轡の系譜」第五五巻第五号〈一九七二年〉、岡内三真「金海良洞里出土遺物について」第五六巻第三号〈一九七三年〉、川西宏幸「埴輪研究の課題」第五六巻第四号〈一九七三年〉、山中一郎「彫器研究法」第五八巻第三号〈一九七五年〉、和田晴吾「畿内の家形石棺」第五九巻第三号〈一九七六年〉、宇野隆夫「多鈕鏡の研究」第六〇巻第一号〈一九七七年〉、丹羽佑一「縄文時代中期における集落の空間構成と集団の諸関係」第六一巻第二号〈一九七八年〉、西村俊範「漢代大型墓の構造」第六二巻第六号〈一九七九年〉、新納泉「単龍・単鳳環頭大刀の編年」第六五巻第四号〈一九八二年〉など）。しかし、『史林』掲載の考古学に関わる「論説」や「研究ノート」を一覧表にすると、『史林』に登龍門的性格が現れるのは一九五〇年代以降のことで、その性格が濃厚になるのは一九六〇年代も終わり、つまり、私が京都大学に入学する少し前のことであったことがわかる。

それ以前、戦後の京大考古学研究室は『史林』に考古学独自の役割を与えていた。一つは、第三五巻第四号（一九五二年）において「最近の日本考古学の発掘調査報告書」と題し、小林行雄・樋口隆康・坪井清足・横山浩一・藤澤長治が、三田史学会『加茂遺跡』、文化財保護委員会『吉胡貝塚』、日本考古学協会『一貴山銚子塚古墳の研究』、有年考古館『兵庫県赤穂郡西野山第3号墳』、東亜考古学会『対馬』を取り上げ、考古学の報告書としてあるべき姿を検討し、辛口の批評を加えた例だ。曰く「図の縮尺が不明・不確実」「行き届いた編集技術が十分に駆使されていない」「最近流行の共同執筆に反省を促す」「今一息の平易さを望む」等々……。同じく第三七巻第二号（一九五四年）においても、川端（西谷）真治・金関恕を新メンバーに加え、大湯環状列石・島田川・伊場・千種遺跡、日吉加瀬古墳・肥前谷口古墳・河内黒姫

山古墳・カトンボ山古墳・賤機山古墳・金山古墳・佐良山古墳群などの発掘調査報告書を俎上に挙げて論評している。

濱田耕作が重視したように、考古学の基本資料となる発掘調査成果を共有する手段が、報告書の刊行である。つまり、報告書にレベル差があることは、基本資料の質に格差があることを意味しており、その格差が大きいと考古資料にもとづく立論自体が危うくなる。戦前の「京大報告」で培った報告書作成技術を踏まえた小林等の提言は、おそらく、その格差減少を意図したのだろう。その後、時間はかかるが、坪井や横山等は埋蔵文化財行政において指導的立場に立ち、各都道府県・市町村主導の文化財調査体制を確立。そのなかで報告書の格差是正に尽力する。その結果、現在の考古学研究者は、質の高い報告書＝基本資料を共有できるようになる。一九五〇年代前半における『史林』の報告書論評は、それを促す先駆けとなるものであった。

考古学研究室が与えた『史林』のもう一つの役割は、自らおこなった発掘成果公表の場である。研究室関係者が関与した発掘成果速報を『史林』に投稿することは戦前にもあった（第二三巻第一号、末永雅雄「唐古遺跡の調査概報」一九三八年）。しかし、発掘件数自体が少ないので、主流にはならなかった。一九五〇年代の中頃から後半にかけての『史林』の「彙報」や「学会報」には、京大考古学研究室員がおもに近畿地方で発掘調査に従事した記事が散見する。そして一時的であるが、『史林』の「資料紹介」に、その成果の概報・略報が掲載されている。第三六巻第二号（一九五三年）の滋賀・宮山古墳、同第三号の京都・椿井大塚山古墳、第三七巻第三号（一九五四年）の京都・小浜岡古墳、第三八巻第五号（一九五五年）の大阪・南塚古墳、第四〇巻第二号（一九五七年）の京都・広沢古墳、第四九巻第一号（一九六六年）の和歌山・鳴滝団地古墳群、同第二号の京都府北部の古墳、第五〇巻第五号（一九六七年）の京都・奥海印寺瓦窯跡などである。紙幅に制限されながらも要領を得た報文で、しかも、調査から一年も経ずに公表された例もある。

これらの概報・略報で周知された遺跡のなかには、資金的・体制的に本報告刊行まで至らず、現在なお『史林』が唯一の基本資料となっている例もある。しかし、一九五〇年代末以降、「彙報」や「研究室報」が研究室員による発掘を報じても、『史林』でその成果を公表することが稀になる。例えば、第四一巻第六号（一九五八年）の「彙報」は、京都市大覚寺丸山古墳・北野廃寺・大宅廃寺の発掘への関与を報じているが、のちの『史林』の「資料紹介」にその報文は掲載されなかった。紙面が広く、口絵写真も掲載できる専門雑誌で報じられた遺跡もあるが、基本的には、成

果を整理・公表するのが不可能なほど、発掘件数が増加した結果と思われる。第四九巻二号（一九六六年）で「資料紹介」された京都府北部の古墳調査は、以後、京都府教育委員会が年度ごとの報告書を刊行する体制が整う直前の調査である。『史林』の概報と、発掘に参加した京都大学考古学研究会の同人誌『トレンチ』に掲載された教養部の学生による報文が、現時点で公表されている唯二つの発掘の記録となっている。

以後、とくに一九七〇年代以降は、都道府県市町村が発掘調査を担当する体制が次第に整う。発掘成果も教育委員会をはじめとする公的調査機関が刊行する方式が常態化し、『史林』の「調査報告」や「資料紹介」欄が活躍する余地は少なくなる。その後の考古学研究室がおこなった発掘や測量調査成果が『史林』に掲載されるのは、おもに科学研究費によるものだ（第五四巻第三号「京都大学中央アジア学術調査隊一九七〇年度の調査」一九七一年、同第六号「京都向日丘陵の発掘調査概報」一九七一年、第六四巻第三号「京都府長岡京市カラネガ岳一・二号墳の発掘調査」一九八一年、第七〇巻第四号「滋賀県雪野寺跡の測量調査」一九八七年）。科学研究費助成事業においても、報告書の公刊が義務となった昨今では、その調査成果が『史林』に掲載されることもなくなるであろう。

これからの『史林』と考古学

与えられた課題には、考古学において『史林』が果たした役割を回顧するだけでなく、将来への展望も含まれている。しかし、先のことは、よくわからない。おそらく、登龍門として、考古学専攻生が『史林』に修士論文や博士論文の一部を投稿することは、これからも続くだろう。『史林』に掲載された考古学の「論説」や「研究ノート」には、研究史に名を残す名論文が少なくない。その成果は『史林』が誇るべき伝統である。一方、戦後のどさくさで、埋蔵文化財行政が確立する以前に考古学研究室がその欠を補い、『史林』を発掘成果速報公表の場としたような事態は、一つの時代相として研究史上で評価されることはあっても、今後、同じ事態が生じることはないはずだ。

ただし、『史林』の利点が、史学各分野と地理学が発表の場を共有する学際性にあるならば、史学・地理学に限らず、学際性をさらに高め、その成果を提供する基盤は考古学にあるかもしれない。理学部の近重眞澄による銅器分析成果なども、『史林』に掲載された戦前における研究成果だ（第三巻第二号「東洋古銅器の化学的研究」一九一八年、第四巻第二号「化学より見たる東洋上代の文化」一九一九年、第一四巻第二号「硬化法を用ゐて修理せ

る浮石寺の壁画」一九二九年、第一五巻第二号「漢鏡の成分及其複製」一九三〇年）。現在では文化財科学が一研究分野として市民権を得て、材質分析や保存科学などの専門細分化傾向も認められる。しかし、史学系の学術誌に、自然科学系研究者が複数回にわたって投稿しているのは、戦前にはめずらしい。

これは梅原末治が推進した考古資料の科学分析の嚆矢と位置づけることが多い。しかし、近重眞澄は本草学に興味を持っており、そのため考古資料の科学分析をみずから希望したらしい。第三巻第二号論文の「結語」は、「独り才足らず財足らず時亦足らず。徒に折戟を弄して独り空砦に拠り、青泥盤々として百歩に九折す。前途渺芒それ将に倚るなきを奈何。記し了はって憮然久之」とあり、理系の立場で考古資料の分析に手を染めた先駆者の孤独感が漂う。必ずしも考古学サイドの必要性や依頼にもとづき、近重が分析に手を染めたわけではないようだ。考古資料は陳列館にあり、近重が分析に着手した当時は梅原が陳列館の助手を勤めていた。しかし、新村出による京都の切支丹墓碑の紹介（第三巻第一号、一九一八年）が一九二六年の『切支丹遺物の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告第七冊に結実したことや、「考古学の栞」に続き天沼俊一「古建築研究の栞」の連載が始まったことを考え合わせると、『史林』に理工系をはじめとする他分野の研究者を招いたのは、濱田耕作であった可能性も高い。

考古学の学際性は、今後さらに発展するだろう。『史林』も史学・地理学分野に限らず、理系も含めた学際的研究成果公表の場として発展する可能性を秘めている。なお、『史林』に掲載された考古学書籍・報告書の「書評」や「紹介」には、日本史など他分野の研究者が寄せたものが少なくない。考古学専門誌には見られない現象である。残念ながら、考古学研究者が他分野の「書評」「紹介」に手を出した例はごくわずかであるが、『史林』のもつ学際性がよく示されている。

現在、各分野の研究対象は細分化の一途をたどっている。『史林』掲載論文も、同じ史学・地理学系統であっても、他分野の研究者には理解できないものが多くを占めるようになった。かつて濱田が示したように、研究対象となる時代や地域が多岐にわたる考古学の場合、詳細化した分析成果を十分に理解することは、考古学研究者の間でさえも困難になりつつある。しかし、史学研究会は、同じ主題で異分野の研究者が研究成果を公表する年一回の例会など、相互理解の道を模索している。研究が細分化・詳細化した現代であるからこそ、『史林』の存在意義はさらに大きくなっていると考えることもできる。

（京都大学名誉教授）